

「この人を見よ」

(ピラトの裁判)

(マルコ15:1～15)

挽地茂男

2019.9.8 日本基督教団・千歳丘教会

導入：讚美歌 2 1 8 番

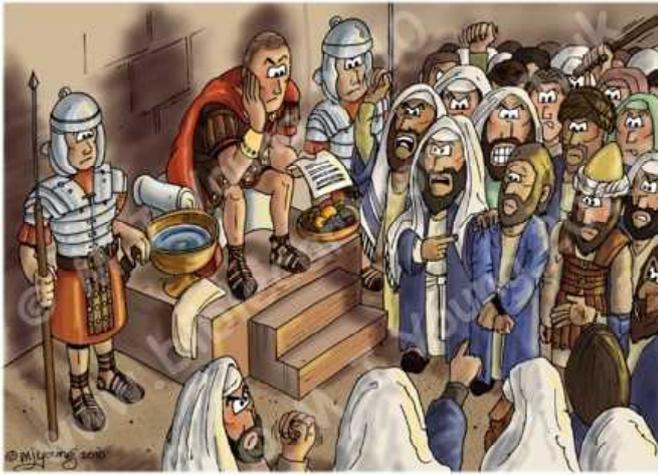
1. 「夜を守る友よ、闇夜を照らす
道のひかりは まだ昇らずや」
「旅ゆく友よ、かの山の端の
さかえ輝く 星かげ見ずや」
2. 「さかえ輝く その星かげに
消えぬ望みは 懸りてありや」
「つきぬ恵みも くちぬ真理も
いよよ分明に 燦めくを見よ」
3. 「露にしめとて 夜を守る業の
務めもはつる 朝は近きか」
「道になやみて 旅ゆく友の
待ちにし君も 今し来ませり」
わたしたちが今、読んでいます

受難物語では、朝が明けると最高
法院(サンヒドリン)が召集されま
した。あと2回夜明けを過ごせば、
復活の朝です。救いの完成に向か
って、着実に夜明けは繰り返され
ます。今日の夜明けは、今日なす
べき営みに人々を導きます。召集
された最高法院は、イエスの死罪
を確認すると、ローマ総督ピラト

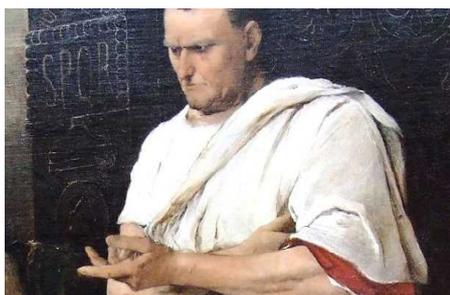
の許に主イエスを送致します。ピ
ラトによる主イエスの詮議の始ま
りです。1節。「15:1 夜が明けら
れと、祭司長たちは、長老や律
法学者たちと共に、つまり最高法
院全体で相談した後、イエスを縛
って引いて行き、ピラトに渡し
た。」ピラトは主イエスに、2節
a、「15:2 ピラトがイエスに、『お
前がユダヤ人の王なのか』
と尋問し」ます。それに対
して2節b。



「すると、イエスは、『それは、
あなたが言っていることです』と
答えられた」のでした。実は、こ
れが主イエスの最後の言葉でし
た。これ以降、十字架の苦しみの
場面で言葉を発するまで—マル
コ福音書によれば—この地上で
はもう一言も発することをなさら
なかったのです。主イエスの返答。
つまり「『ユダヤ人の王』などと
はわたしが自称していることでは
なく、あなたがそう言っているだ
けだ」という主イエスのピラトに
対する返答を耳にすると、黙って
いられない人たちがいます。祭司
長たちです。3節。「15:3 そこで



祭司長たちが、いろいろとイエスを訴えた。」もう主イエスは何もお答えになりません。主イエスには、この場をなんとか切り抜けようと知恵をしぼっている様子は微塵も見えませんが、まず主イエスには、何としても死を免れようという意志がありません。彼は神の御心が成就するのを第一として、自分の身を通して成っていく神の御心をじっと見ているのです。ピラトは何も答えないイエスに再び問いかけます。4 - 5 節。「15:4 ピラトが再び尋問した。『何も答えがないのか。彼らがあのようにお前を訴えているのに。』15:5 しかし、イエスがもはや何もお答えにならなかった。ピラトは不思議に思った。」



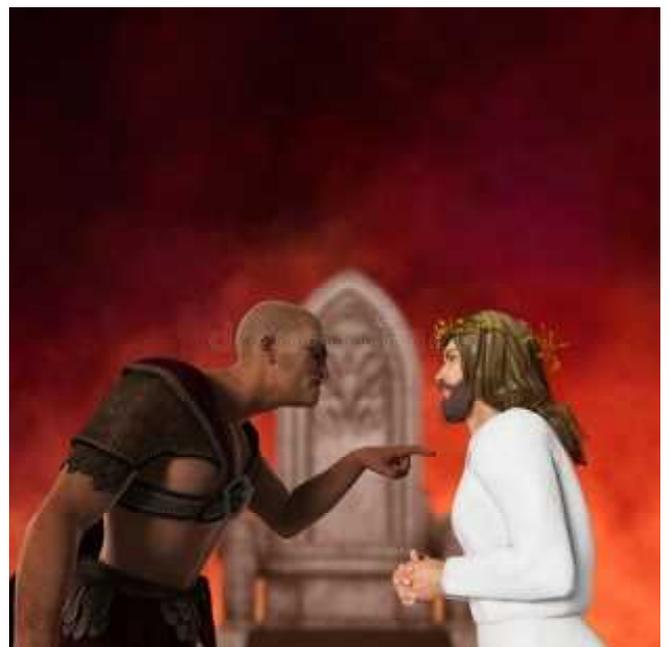
この不思議は、イザヤ書 53 章の〈苦難の僕〉の生き様・死に様に見られる不思議と同じです。イザヤ書 53 章 1 - 4 節。「53:1 わたしたちの聞いたことを、誰が信じえようか。主は御腕の力を誰に示されたことがあるか。53:2 乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように／この人は主の前に育った。見るべき面影はなく／輝かしい風格も、好ましい容姿もない。53:3 彼は軽蔑され、人々に見捨てられ／多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し／わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。53:4 彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに／わたしたちは思っていた／神の手にかかり、打たれたから／彼は苦しんでいるのだ、と。」主イエスの苦しみは〈自業自得〉、身から出た錆、神の罰を受けているのだ、と祭司長や律法学者や長老たちや彼らに追従する群衆は考えたかもしれませんが。主イエスは人びとに〈罪の赦し〉を宣言しました。「あなたの罪は赦される。」「あなたの罪はもう赦されている。」ファリサイ派や律法学者の



人たちの目には明らかな冒涇です。つまり神と神の任命された祭司にのみ許可された〈罪の赦し〉の宣言をヌケヌケと口にするイエスは、冒涇者以外の何者でもない。主イエスが人々に〈罪の赦し〉を伝えれば伝えるほど、彼は冒涇の罪を重ねることになるのです。雪の上を転がして雪だるまが大きくなるように、人々に〈罪の赦し〉を伝えれば伝えるほど、主イエスは宗教指導者たち(祭司長や律法学者や長老たち)の目には、神を冒涇する者、冒涇の塊、罪の塊に成っていったのです。その終着点十字架でした。宗教指導者たちは最高法院(サンヒドリン)で、主イエスに「神の冒涇者」の烙印を確定したのです。実刑は死罪です。しかし一方で今〈苦難の僕〉は神の御心が成就していく時を、ただただ沈黙の内に夜明けを待つように――待っているのです。イザヤ書 53章 7節「**53:7 苦役を課せ**

られて、かがみ込み／彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように／毛を切る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかった。」

ピラトには事の真相は分かりませんでした。いや主イエス以外は、誰も分かってはいなかったでしょう。この囚人には、何か不思議に思えることがいくつもある、それが気にかかるだけでした。ピラト〔ラテン語読みした正式名は、ポンティウス・ピーラトゥス Pontius Pilatus、生没年不詳〕は、ローマ帝国の第5代ユダヤ属州総督〔ローマの歴史家タキトゥスによれば皇帝属領長官、在任：26年-36年〕。彼は「祭司長たち〔大祭司と大祭司退職者たち〕が、いろ



いろとイエスを訴え」(v.3)るのを聴きながら、この訴えが「ユダヤ人宗教指導者たちのイエスに対するねたみから」なされていると判断します。今、群衆は、祭の慣例に従って囚人の一人に特赦を願い出ています。これをチャンスと変えようとピラトは考えます。言葉を荒げている祭司長や宗教指導者たち以外の群衆に機会を与えれば、この群衆はきっと、彼らの間で人気のあったこのイエスという男の釈放を願うだろうと考えます。イエスがエルサレムに入城したときの歓呼の声を、ピラトは覚えていました。これで一挙に特赦に持ち込んで、一件落着となる。事件はこれで幕引きだ、とピラトは考えます。6-10節。「15:6 ところで、祭りの度ごとに、ピラトは人々が願い出る囚人を一人釈放していた。15:7 さて、暴動のとき人殺しをして投獄されていた暴徒たちの中に、バラバという男がいた。15:8 群衆が押しかけて来て、いつものようにしてほしいと要求し始めた。15:9 そこで、ピラトは、「あのユダヤ人の王を釈放してほしいのか」と言った。15:10 祭司長たちがイエスを引き

渡したのは、ねたみのためだと分かっていたからである。」しかし祭司長たちは、主イエスを逮捕するときに遣わした子飼いの群衆から始めて、群衆を扇動し始めます。11節。「15:11 祭司長たちは、バラバの方を釈放してもらおうように群衆を扇動した。」なんと事態は予想しない方向にむかっ行きます。ピラトは自分の思惑が外れると、12節。「15:12 そこで、ピラトは改めて、「それでは、ユダヤ人の王とお前たちが言っているあの者は、どうしてほしいのか」と言った。」祭司長たちに扇動された群衆はさらに叫びます。13節。「15:13 群衆はまた叫んだ。『十字架につけろ。』」ピラトは群衆がこれほど執拗にイエスを亡き者にしようと願っているのが理解できません。そこで14節。「15:14 ピラトは言った。『いったいどん

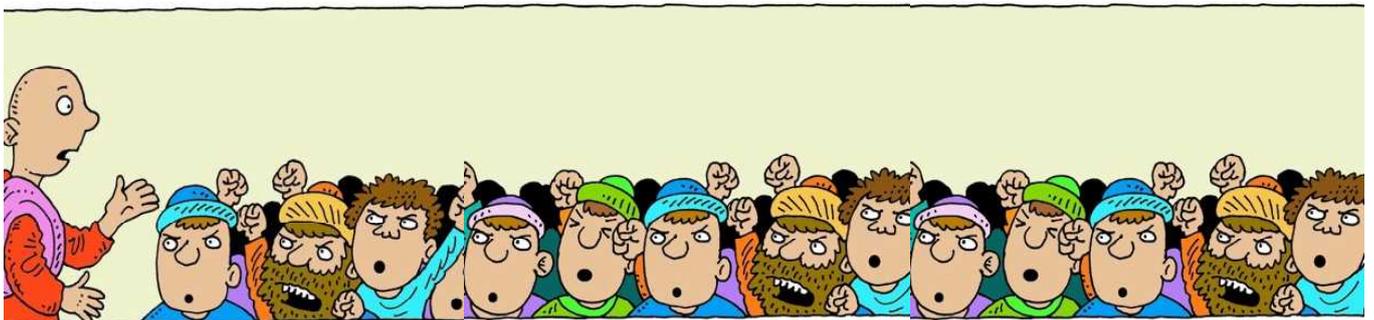


Antonio Ciseri, "Ecce Homo!" 1871

な悪事を働いたというのか。」すると「群衆はますます激しく、『十字架につけろ』と叫び立て」るのです。ヨハネ福音書は主イエスの無実を分からせるために、ピラトが群衆の面前に主イエスを引き出した、と記しています。ヨハネ19章4-5節。「19:4 ピラトはまた出て来て、言った。「見よ、あの男をあなたたちのところへ引き出そう。そうすれば、わたしが彼に何の罪も見いだせないわけが分かるだろう。」19:5 イエスは茨の冠をかぶり、紫の服を着けて出て来られた。ピラトは、「この人を見よ」〔[ラ] Ecce homo エッケ・ホモ。新共同訳「見よ、この男だ」〕と言った。」
またも、ピラトとの見通しは外れたのです。群衆は紫の衣をつけ、荊の冠を被らされて陵辱された主イエスの姿を見ると、同情の心よりも加虐の喜びに目覚めて、弱り果てた動物に鞭を加えるかのように、叫びます。「十字架につけろ。」もう祭司長

たちの扇動は必要ではありません。群衆は走り出した列車のように、止まらずに動き続け、叫び続けます。「十字架につけろ。」火のついた藁のように、燃え続け、叫び続けます。「十字架につけろ。」何のために叫んでいるかも知らずに叫んでいます。「十字架につけろ。」

ピラトは群衆の要求にこたえて、やむをえずイエスの処刑に踏み切ります。ピラトにとっては、自分の政治生命を守ることが第一であり（ヨハ19:12）、ローマにユダヤの治安に混乱が生じていたこと伝わらないようにしたいという願いがあったからです。この時ピラトは、イエスの死について自分に責任がないことを示そうとして、手を洗ったという記事がマタイ福音書に報告されてます。マタイ福音書の27章24-25節。「27:24 ピラトは、それ以上言っても無駄なばかりか、かえって騒動が起こりそうなを見て、水を



持って来させ、群衆の前で手を洗って言った。「この人の血について、わたしには責任がない。お前たちの問題だ。」27:25 民はこぞって答えた。「その血の責任は、我々と子孫にある。」

フランスのプロヴァンスで造られている“ポンテオ・ピラト石けん”という石けんがあります。値段は7ユーロ、ドルで購入すると9ドル99セント(+配送料14



ドル)。配送料が高いので買うのをやめました。その宣伝文句にこう書かれています。「あなたの罪を全部洗い流してください。あなたのお悩みのゴダコタのすべてからあなたの手を洗ってしまいたいですか。でしたらこの石けんが必要です。一切の責任を取る必要がなくなります。あなたの手をポンテオ・ピラト石けんで、すっきりこっそり綺麗にしておきましょう。〔Product description:

Pontius Pilate Soap - Wash Your Sins Away. Want to wash your hands of the whole affair? Then you need this soap.

Never take the blame for anything - keep your hands squeaky clean with Pontius Pilate soap. Measures 8 x 6x 2.5cm, Manufacturer a typyk, made in Prorance.]. シャレ(冗談)で書かれた商品紹介です。もちろん洗っても罪の責任は消えるわけではありません。ピラトの罪は消えるわけではありません。自己保身のために真実に背を向けた彼の不真実は、わたしたちが毎週告白する使徒信条の中にとどめられました。

「主は…ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け。」主イエスの処刑に参与した総督としての彼の名前が週ごとに確認されるのです。彼は主イエスの無罪を知らながら、人々を満足させるために不当な死刑判決を認めたのであり、真実を曲げた彼の生き方は、真実から報復を受けることになるのです。主イエスの無言の十字架は、多くの人の罪と不真実を明らかにします。十字架で審かれているのは、実は、主イエスではなく、主イエスを罪ある者とした人びとの罪と不真実なのです。そしてつい

にピラトは群衆の声に負けます。
15節。「15:15 ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバを釈放した。そして、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した。」

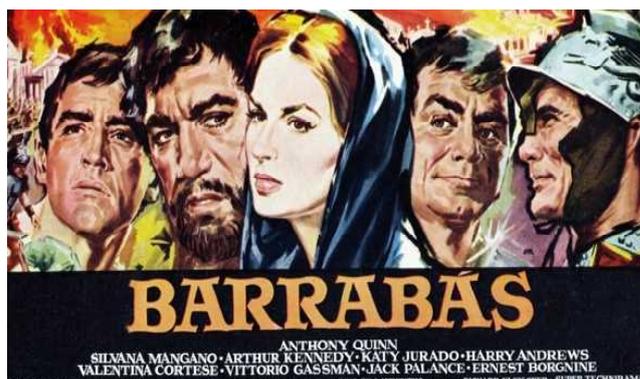


主イエスではなく、バラバが釈放されました。彼は犯罪者です。バラバは、研究者の間では、おそらくローマへの武力抵抗を訴えた熱心党の一員だったのではないかと考えられています。が、それはさておき。聖書の伝えるバラバの記事をもとにして、スウェーデンの作家パール・ラーゲルクヴィストは『バラバ』(Barabbas)〔1950年、Pär Lagerkvist、尾崎義(訳)岩波文庫〕という小説を書きました。この小説で、作者のパール・ラーゲルクヴィストは、1951年のノーベル文学賞を受賞しています。さらにこの小説は、後にアンソニー・クインの主演で映画化(1961年)されました。

ローマのユダヤ総督ピラト(アーサー・ケネディ)は民衆の声におされて、ナザレのイエスに替えて盗賊バラバ(アンソニー・クイン)を赦



免しました。作者ラーゲルクヴィストは、この「イエスに命を貰った男」悪党バラバが、盗賊から信仰に目覚め深化していく過程を描きます。バラバの周りに真実なキリスト教徒が配置されます。信仰に対する疑念・問いかけ・共感を通して真の信仰が追究されていきます。しかし安易に答を出さないのが、ラーゲルクヴィストの特徴でもあります。〔以下の説明は、明快さの観点から映画を基礎にします。映画は相当に脚色されていますが、作品の主要点を把握していると考えます。〕ラーゲルクヴィストがバラバの周りに配置した



①一人目の人物はかつて彼の情婦であったラケル（シルヴァーナ・



マンガーノ／原作では無名の「^{みつくち}兎唇女」）。バラバがラケルと再会したとき、彼女はもうキリスト信者になっていました。バラバはラケルの信仰から来る彼女の心の清らかさに心をゆすぶられます。しかし信者にとって迫害の

時代はすでに始まっていました。信者になっていたラケルも捕えられて処刑されてしまいます。この出来事にバラバは再び狂暴化し、間もなくローマ当局によって捕えられて、シシリー島の硫黄鉱山に流刑となってしまいます。

そして二人目が②その流刑地で出会った、同じ流刑者でキリスト教徒のサハク（ヴィットリオ・ガスマン）でした。ガスの渦巻く地獄のような硫黄鉱山の地下での労役に耐え、多くの囚人が生命を失ってゆく中、バラバとキリスト教徒サハクだけは生きのびます。そしてバラバはキリスト教徒サハクにならって自分の首にかけていた

奴隷鑑札に十字とイエス・キリストの文字を刻みます。このバラバとサハクという不死身の二人の噂を聞いた州総督夫妻は、二人の受け渡しを願い出て、彼らを剣闘士養成所へ入れ、二人をお抱えの剣闘士に育てます。ところがキリスト教徒であるサハクは闘技場で相手をねじ伏せても最終的に殺すことを拒み反逆罪に問われ、養成所の隊長のトルヴァド（ジャック・パランス）に処刑されてしまいます。しかしやがてバラバに、トルヴァドと対決する日がやってきます。

バラバはトルヴァドを倒し、自分の首にかけてた十字〔すでにトルヴァドによって十字と文字は削られていましたが、その精神〕に反してトルヴァドを殺してしまいます。ローマ皇帝（ネロ）はバラバに自由を与えます。バラバはサハクの遺体をキリスト教徒の地下墓地に葬ります。



その直後、ローマに大火事、大火が起こります。ローマが炎上します。「神は旧き世界を、天の火をもって焼き払われる日が来る」と語っていたキリスト教徒の言葉が、今現実になっているのだと誤

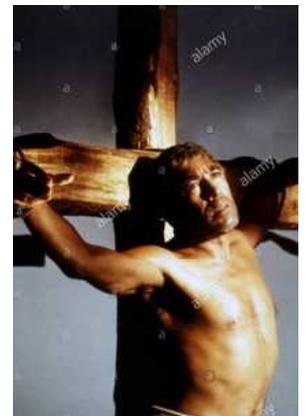


解したバラバは、このローマの大火はキリスト教徒の反乱に違いないと信じます。そう信じたバラバは、このとき神の声を

聞いたように錯覚します。ラーゲルクヴィストの文章です。「磔男がもどって来たのだ！ゴルゴタの丘の彼がもどって来たのだ！その約束どおり、人間を救うため、この世界を滅ぼすために！約束どおりそれを潰滅させ、燃やしてしまうために！いまこそ、彼はその力を示したのだ。そしてバラバが彼を助けようというのだ！悪党バラバ、ゴルゴタ以来の罪深い兄弟である彼は裏切らない。いまは裏切らない。今度は裏切らない。」これはバラバの信仰告白なのです。ラケルを助けられなかった。サハクも助けられなかった。今こそ神

に従い、キリスト教徒を助けるのだ。今こそ古きものを焼き払うのだ、と彼は狂ったようにローマの市街に火をつけて回ります。そしてついにまた捕えられて、放火の嫌疑をかけられた800人のキリスト教徒とともに十字架にかけられまてしまいます。

バラバの物語を通して、ラーゲルクヴィストは、信仰を完成形として描きませんでした。彼が問いかけた表現した信仰とは、人間的な猜疑心と弱さと誤解から、表面的には、キリストへの接近と離反を繰り返しながらも、イエスから逃れなくなった心、心の底でゴルゴタの兄弟に命を貰ったことを忘れない(忘れられない)という一種の①「こだわり」でした。そしてこの「こだわり」がこの物語の最後では、バラバが十字架上で語る「お前さんに委せるよ、おれの魂を」という言葉に昇華します。ラーゲルクヴィストにおいて信仰は、固定的な行動パターンとしてではなく、②「動的」なもの(動きのあるもの)、変化して



いくものとしてとらえられます。
その意味で信仰はつねに成長過程にあるのです。つまり信仰の歩みとは、ゴルゴタの兄弟と、わたしとの生きた長い関わりの物語のことなのです。

新しい一週間も、わたしたちが「ゴルゴタの兄弟から命を貰った」ことを忘れず、また、わたしたちのために死に、また今も生きておられる主イエスとともに新しい物語の一頁を記していきたいと思います。今週も、主と共に歩んでまいりましょう。祈ります。

2019.9.8 日本基督教団・千歳丘教会



15:1 夜が明けるとすぐ、祭司長たちは、長老や律法学者たちと共に、つまり最高法院全体で相談した後、イエスを縛って引いて行き、ピラトに渡した。

15:2 ピラトがイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」と答えられた。

15:3 そこで祭司長たちが、いろいろとイエスを訴えた。

15:4 ピラトが再び尋問した。「何も答えないのか。彼らがあのようにお前を訴えているのに。」

15:5 しかし、イエスがもはや何もお答えにならなかつたので、ピラトは不思議に思った。

15:6 ところで、祭りの度ごとに、ピラトは人々が願い出る囚人を一人釈放していた。

15:7 さて、暴動のとき人殺しをして投獄されていた暴徒たちの中に、バラバという男がいた。

15:8 群衆が押しかけて来て、いつものようにしてほしいと要求し始めた。

15:9 そこで、ピラトは、「あのユダヤ人の王を釈放してほしいのか」と言った。

15:10 祭司長たちがイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと分かっていたからである。

15:11 祭司長たちは、バラバの方を釈放してもらうように群衆を扇動した。

15:12 そこで、ピラトは改めて、「それでは、ユダヤ人の王とお前たちが言っているあの者は、どうしてほしいのか」と言った。

15:13 群衆はまた叫んだ。「十字架につけろ。」

15:14 ピラトは言った。「いったいどんな悪事を働いたというのか。」群衆はますます激しく、「十字架につけろ」と叫び立てた。

15:15 ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバを釈放した。そして、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した。

15:16 兵士たちは、官邸、すなわち総督官邸の中に、イエスを引いて行き、部隊の全員を呼び集めた。

15:17 そして、イエスに紫の服を着せ、茨の冠を編んでかぶらせ、
15:18 「ユダヤ人の王、万歳」と言って敬礼し始めた。

15:19 また何度も、葦の棒で頭をたたき、唾を吐きかけ、ひざまず

いて拜んだりした。

15:20 このようにイエスを侮辱したあげく、紫の服を脱がせて元の服を着せた。そして、十字架につけるために外へ引き出した。

15・1 Καὶ εὐθὺς πρῶτῃ συμβούλιον ποιήσαντες οἱ ἀρχιερεῖς μετὰ τῶν πρεσβυτέρων καὶ γραμματέων καὶ ὄλον τὸ συνέδριον, δῆσαντες τὸν Ἰησοῦν ἀπήνεγκαν καὶ παρέδωκαν Πιλάτῳ.

15・2 καὶ ἐπηρώτησεν αὐτὸν ὁ Πιλάτος, Σὺ εἶ ὁ βασιλεὺς τῶν Ἰουδαίων; ὁ δὲ ἀποκριθεὶς αὐτῷ λέγει, Σὺ λέγεις.

15・3 καὶ κατηγοροῦν αὐτοῦ οἱ ἀρχιερεῖς πολλά.

15・4 ὁ δὲ Πιλάτος πάλιν ἐπηρώτα αὐτὸν λέγων, Οὐκ ἀποκρίνη οὐδέν; ἴδε πόσα σου κατηγοροῦσιν.

15・5 ὁ δὲ Ἰησοῦς οὐκέτι οὐδέν ἀπεκρίθη, ὥστε θαυμάζειν τὸν Πιλάτον.

15・6 Κατὰ δὲ ἑορτὴν ἀπέλυεν αὐτοῖς ἓνα δέσμιον ὃν παρητοῦντο.

15・7 ἦν δὲ ὁ λεγόμενος Βαραββᾶς μετὰ τῶν στασιαστῶν δεδεμένος οἵτινες ἐν τῇ στάσει φόνον πεποιήκεισαν.

15・8 καὶ ἀναβάς ὁ ὄχλος ἤρξατο

αἰτεῖσθαι καθὼς ἐποίει αὐτοῖς.

15・9 ὁ δὲ Πιλάτος ἀπεκρίθη αὐτοῖς λέγων, Θέλετε ἀπολύσω ὑμῖν τὸν βασιλέα τῶν Ἰουδαίων;

15・10 ἐγίνωσκεν γὰρ ὅτι διὰ φθόνον παραδεδώκεισαν αὐτὸν οἱ ἀρχιερεῖς.

15・11 οἱ δὲ ἀρχιερεῖς ἀνέσεισαν τὸν ὄχλον ἵνα μᾶλλον τὸν Βαραββᾶν ἀπολύσῃ αὐτοῖς.

15・12 ὁ δὲ Πιλάτος πάλιν ἀποκριθεὶς ἔλεγεν αὐτοῖς, Τί ου(θέλετε) ποιήσω (ὃν λέγετε) τὸν βασιλέα τῶν Ἰουδαίων;

15・13 οἱ δὲ πάλιν ἔκραξαν, Σταύρωσον αὐτόν.

15・14 ὁ δὲ Πιλάτος ἔλεγεν αὐτοῖς, Τί γὰρ ἐποίησεν κακόν; οἱ δὲ περισσῶς ἔκραξαν, Σταύρωσον αὐτόν.

15・15 ὁ δὲ Πιλάτος βουλόμενος τῷ ὄχλῳ τὸ ἱκανὸν ποιῆσαι ἀπέλυσεν αὐτοῖς τὸν Βαραββᾶν, καὶ παρέδωκεν τὸν Ἰησοῦν φραγελλώσας ἵνα σταυρωθῇ.

15・16 Οἱ δὲ στρατιῶται ἀπήγαγον αὐτὸν ἔσω τῆς αὐλῆς, ὃ ἐστὶν πραιτώριον, καὶ συγκαλοῦσιν ὅλην τὴν σπεῖραν.

15・17 καὶ ἐνδιδύσκουσιν αὐτὸν πορφύραν καὶ περιτιθέασιν αὐτῷ πλέξαντες ἀκάνθινον στέφανον·

15・18 καὶ ἤρξαντο ἀσπάζεσθαι αὐτόν,
Χαῖρε, βασιλεῦ τῶν Ἰουδαίων·

15・19 καὶ ἔτυπτον αὐτοῦ τὴν κεφαλὴν
καλάμῳ καὶ ἐνέπτυνον αὐτῷ καὶ
τιθέντες τὰ γόνατα προσεκύνουν
αὐτῷ.

15・20 καὶ ὅτε ἐνέπαιξαν αὐτῷ,
ἐξέδυσαν αὐτόν τὴν πορφύραν καὶ
ἐνέδυσαν αὐτόν τὰ ἱμάτια αὐτοῦ. καὶ
ἐξάγουσιν αὐτόν ἵνα σταυρώσωσιν
αὐτόν.

イザヤ書 53章

53:1 わたしたちの聞いたことを、
誰が信じえようか。主は御腕の力
を誰に示されたことがあるか。

53:2 乾いた地に埋もれた根から
生え出た若枝のように／この人は
主の前に育った。見るべき面影は
なく／輝かしい風格も、好ましい
容姿もない。

53:3 彼は軽蔑され、人々に見捨て
られ／多くの痛みを負い、病を
知っている。彼はわたしたちに顔
を隠し／わたしたちは彼を軽蔑
し、無視していた。

53:4 彼が担ったのはわたしたち
の病／彼が負ったのはわたしたち
の痛みであったのに／わたしたち
は思っていた／神の手にかかり、

打たれたから／彼は苦しんでいる
のだ、と。

53:5 彼が刺し貫かれたのは／わ
たしたちの背きのためであり／彼
が打ち砕かれたのは／わたしたち
の咎のためであった。彼の受けた
懲らしめによって／わたしたちに
平和が与えられ／彼の受けた傷に
よって、わたしたちはいやされた。

53:6 わたしたちは羊の群れ／道
を誤り、それぞれの方角に向かっ
て行った。そのわたしたちの罪を
すべて／主は彼に負わせられた。

53:7 苦役を課せられて、かがみ
込み／彼は口を開かなかった。屠
り場に引かれる小羊のように／毛
を切る者の前に物を言わない羊の
ように／彼は口を開かなかった。

53:8 捕らえられ、裁きを受けて、
彼は命を取られた。彼の時代の誰
が思い巡らしたであろうか／わた
しの民の背きのゆえに、彼が神の
手にかかり／命ある者の地から断
たれたことを。

53:9 彼は不法を働かず／その口
に偽りもなかったのに／その墓は
神に逆らう者と共にされ／富める
者と共に葬られた。

53:10 病に苦しむこの人を打ち砕
こうと主は望まれ／彼は自らを償

いの献げ物とした。彼は、子孫が
末永く続くのを見る。主の望まれ
ることは／彼の手によって成し遂
げられる。

53:11 彼は自らの苦しみの実りを見
／それを知って満足する。わた
しの僕は、多くの人々が正しい者と
されるために／彼らの罪を自ら負
った。

53:12 それゆえ、わたしは多くの
人を彼の取り分とし／彼は戦利品
としておびただしい人を受け
る。彼が自らをなげうち、死んで／罪
人のひとりに数えられたからだ。
多くの人々の過ちを担い／背いた者
のために執り成しをしたのは／こ
の人であった。